

「発憤する」

会津バスケットボール協会理事長 室井 富仁

不覚であった。こんなに凄い本があることを今まで知らなかった。『言志四録』である。この本は江戸時代末期の大儒学者である佐藤一斎が人生の後半生40余年にわたって書かれた語録であり、修養の糧、処世の心得として書かれた指導書である。

佐藤一斎という人は日本史の教科書にも出てくる人物であるが、門下生は数千人を数えたと言われる。その中でも有名な人物は、佐久間象山、安積良斎、横井小楠などである。特にこのうち、幕末日本の先覚者といわれる佐久間象山の門下から勝海舟、坂本竜馬、吉田松陰などの志士が輩出されたことはあまりにも有名である。また、この吉田松陰の門下からは高杉晋作、久坂玄瑞、木戸孝允(桂小五郎)、伊藤博文、山形有朋などが輩出し、彼らの力により明治維新が成し遂げられる。さらに特筆すべきことは、西郷隆盛もこの『言志四録』を愛読し、その中のいくつかを自分の座右の銘としていたことである。

この『言志四録』の一つ『言志録』第5条に次のようなことが書いてあった(原文省略)。「発憤するの憤の一字は、学問に進むための最も必要な道具である。かの顔淵が『舜も自分も同じ人間ではないのか』(成らんとする志さえあれば、自分だって舜のような人物になれるぞ)と言ったことは、まさに憤ということである」

今でも思い出す。3年前葵高校の生徒が2人、チェコのプラハで行われたユーロバスケットボールキャンプに参加した。このキャンプのオールスター戦がインターネットで放映された。オールスター戦は3カ国の参加者50名位の中からたった14名しか参加できない。1チーム7名で8分4クォーターでゲームが行われた。白色ユニフォームチームベンチになんと葵高校のS君がいるではないか。そのベンチ後ろには国体県代表のF高校センタープレイヤーがいた。コーチはトステイン・ロイブル。しかもS君はスタメンである。思わず鳥肌が立ってしまった。決して長い間焼き鳥を食べていなかったせいではない。あの不器用の代名詞(失礼!)でもあったS君がヨーロッパの舞台上でスタメンで立っているではないか。会津地区選抜でもスタメンに立てなかったのに……。

ネットの動画を見たS君のお母さんから「あの子が海外で怖じ気づくことなくプレーしている姿、信じられません。思い切って行かせてあげてよかったです」と電話が来た。

出発前のS君の不安気な顔が思い出された。しかし、ネットでのS君の堂々としたプレーを思い出すと佐藤一斎の『言志録』第5条発憤の文章が頭をよぎる。彼はどこかで発憤したのだろう。成田の空港か、はたまたプラハに行ってからか。外国でバスケットボールをプレーをすること、世界を目指すトップアスリート達と共にプレーすることに感激して奮い立ち、励み立った気持ちが「俺もやれる」という思いに到達したのだろうか。そして、いざキャンプが始まるやいなや今度は、「ヨーロッパのトッププレイヤーも自分たちも同じ人間、同じ高校生じゃないか」ということに気づいたのだろうか。

「俺もやれる」と思うか、「俺はとてもしやれない」と思うかが、人間一生の別れ路である。あの吉田松陰を育てた村田清風が富士山を見て次のように歌ったという。

「来てみれば さほどでもなし 富士の山
 釈迦や孔子も かくやありなん」